

ことから播種面積が前年度を上回った。また、2014年秋の降雨不足で発芽や初期生育が阻害されたものの、4～5月の降雨を受けて作柄が改善したこと等により、単収は、生育期間を通じて総じて好天に恵まれた前年度を下回るものの過去5年平均を上回ることから、生産量は前年度より増加（9.1%）し、27.0百万トンとなる見込みである。

写真：ウクライナ ドニエプロペトロフスク州（黒土地帯）（2枚とも）
 積雪(スノーカバー)が薄い休眠中の冬小麦畑 (2015年1月) 完熟期を迎えた冬小麦 (2015年7月)



豪州では、小麦産地の広い範囲で2015年9月から10月半ばにかけての降水量が平年を下回り、一部の産地で出穂期から結実期に高温乾燥型の天候に見舞われたものの、大部分の産地では比較的好天に恵まれたことから、生産量は前年度より増加（9.9%）し、26.0百万トンとなる見込みである。

豪州農業経済資源科学局（ABARES）「Australian crop report, February 2016」（2016.2.9）によれば、州別には、西部のウエスタンオーストラリア州で8.8百万トンと前年度をやや下回る（▲0.3%）とともに、生育期間を通じて乾燥が続いたビクトリア州でも2.1百万トンと前年度を下回る（▲15.3%）ものの、他の産地では前年度を上回り、ニューサウスウェールズ州7.5百万トン（対前年度比16.3%増）、サウスオーストラリア州4.4百万トン（同4.1%増）、クイーンズランド州1.4百万トン（対前年度比31.3%増）となっている。品質については、ビクトリア州では総じて良好であるが他州はばらつきが大きく、最大の生産州であるウエスタンオーストラリア州では、たんぱく含有量は例年並みとなっているものの、穀粒は小さいものが多い（ふるい下が多い）となっている。

写真：豪州ビクトリア州西部（2015年7月）
 乾燥状態が続いて播種が遅れたほ場



写真：豪州ニューサウスウェールズ州南部
 収穫期の小麦の穂と穀粒（2015年12月）



写真提供：Australian Crop Forecasters

写真：カザフスタン北部 北カザフスタン州（2枚とも）

節間伸長期を迎えた春小麦（2014年7月）

完熟期を迎えた春小麦（2014年10月）



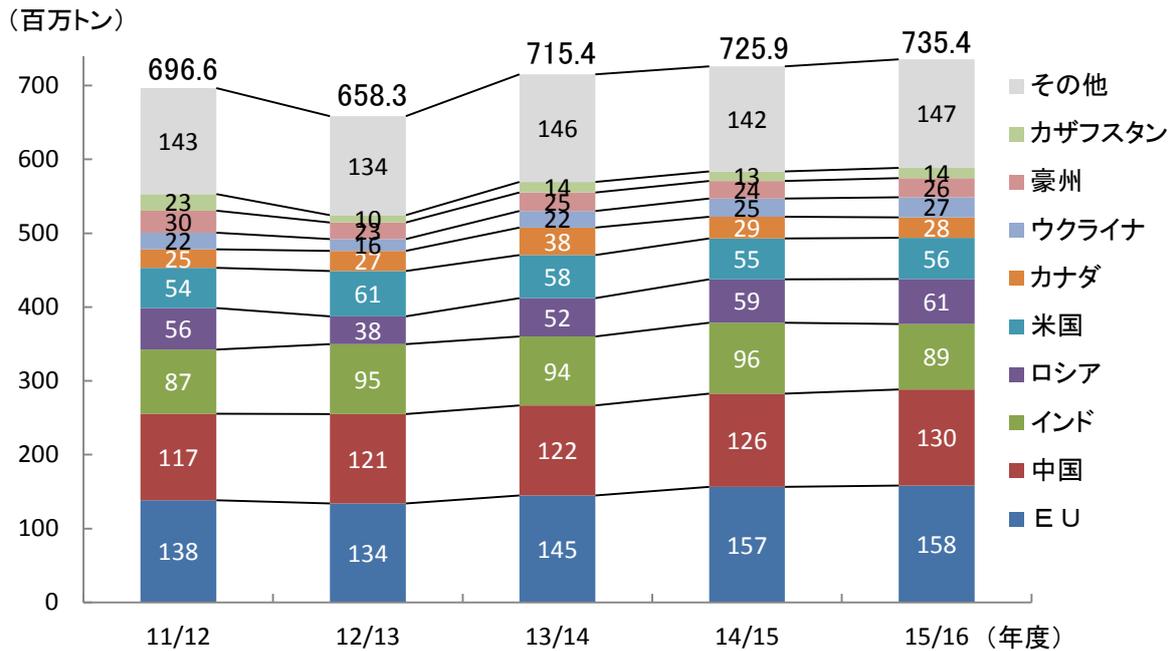
カザフスタンでは、生産量の9割以上を占める春小麦は、主産地の北部の一部で2015年5月の降雨による播種作業の遅延や、9月の降雨による収穫遅延が生じたものの、全体的には生育期間を通じて好天に恵まれたことから、生産量は前年度より増加（7.7%）し、14.0百万トンとなる見込みである。なお、収穫時期の降雨により、北部の一部で品質が低下したと見られる。

表 IV-1-③ 小麦の2015/16年度収穫面積及び単収

区分	生産量		収穫面積		単収	
	(百万t)	対前年度増減率	(百万ha)	対前年度増減率	(t/ha)	対前年度増減率
世界合計	735.4	1.3%	224.83	1.0%	3.25	0.3%
E U	158.0	0.9%	26.73	▲ 0.2%	5.91	1.2%
中国	130.2	3.2%	24.14	0.3%	5.39	2.9%
インド	88.9	▲ 7.2%	30.60	0.4%	2.91	▲ 7.6%
ロシア	61.0	3.2%	25.60	8.3%	2.38	▲ 4.8%
米国	55.8	1.3%	19.06	1.5%	2.93	▲ 0.3%
(参考)						
カナダ	27.6	▲ 6.2%	9.60	1.3%	2.88	▲ 7.1%
ウクライナ	27.0	9.1%	7.00	11.1%	3.86	▲ 1.8%
豪州	26.0	9.9%	13.80	▲ 0.1%	1.74	▲ 13.0%
カザフスタン	14.0	7.7%	11.50	▲ 3.5%	1.02	▲ 5.6%

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、「Grain: World Markets and Trade」、「World Agricultural Production」、「PS&D」(January 2016)

図 IV-1-① 世界の小麦生産の状況



資料: USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、「Grain: World Markets and Trade」、「World Agricultural Production」、「PS&D」(January 2016)をもとに農林水産省で作成。

イ 消費量

2015/16年度の消費量は、人口の増加や、EU及び米国等での飼料用需要の増加に伴い、史上最高となった前年度を更に9.0百万トン(1.3%)上回り、716.1百万トンとなる見込みである。

なお、2015/16年度の世界の消費量に占める国・地域別の割合を見てみると、第1位のEUが18%、第3位の中国が16%、第3位のインドが13%と、上位3カ国・地域で全体の約半分を占める見込みである。(表 IV-1-④)

表 IV-1-④ 世界の小麦消費の状況

区分	(単位:百万トン)						
	2011/12	2012/13	2013/14	2014/15	2015/16 (予測)	対前年度 増減率(%)	世界に占め る割合(%)
世界合計	697.5	679.0	698.4	707.2	716.1	1.3	100
うち飼料用	148.4	138.2	126.7	132.8	138.0	3.9	
EU	127.2	119.3	117.3	123.5	125.8	1.8	18
中国	122.5	125.0	116.5	118.5	118.0	▲0.4	16
インド	81.4	83.8	93.9	93.1	93.9	0.9	13
ロシア	38.0	33.6	34.1	35.5	37.0	4.2	5
米国	32.0	37.8	34.3	31.6	32.2	2.1	4

資料: USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、「Grain: World Markets and Trade」、「PS&D」(January 2016)

用途別の需要を見ると、食料用等（食料用、種子用及び工業用を含む）は、主にアジア及びアフリカ地域の開発途上国において人口が増加していることから、世界全体で前年度より増加（1.3%）し、576.3百万トンとなる見込みである。（表 IV-1-⑤）

なお、国際連合食料農業機関（FAO）「Food Outlook」（October 2015）によれば、2015/16年度の一人当たりの食料用の小麦消費量の平均は、世界全体で67.0kg（前年度67.2kg）とほぼ横ばいで推移している。

表 IV-1-⑤ 世界の小麦の食料用等需要の状況

(単位:百万トン)

区 分	2011/12	2012/13	2013/14	2014/15	2015/16 (予測)	対前年度 増減率(%)	世界に占め る割合(%)
世界合計	540.9	548.8	564.1	568.8	576.3	1.3	100
中国	98.5	100.0	100.5	101.5	103.0	1.5	18
インド	78.3	80.4	89.0	88.6	89.1	0.6	15
E U	69.7	68.3	68.3	69.0	68.8	▲ 0.4	12
米 国	27.7	27.9	28.1	28.3	28.1	▲ 0.6	5
パキスタン	22.7	23.3	23.5	23.5	23.6	0.4	4

資料：USDA「PS&D」（January 2016）

注）食料用等には、食料用、種子用及び工業用の消費を含む。

小麦の飼料用需要は、中国で減少するものの、EU、ロシア等で堅調な需要が見込まれることから、世界全体では前年度より増加（3.9%）し、138.0百万トンとなる見込みである。

表 IV-1-⑥ 世界の小麦の飼料用需要の状況

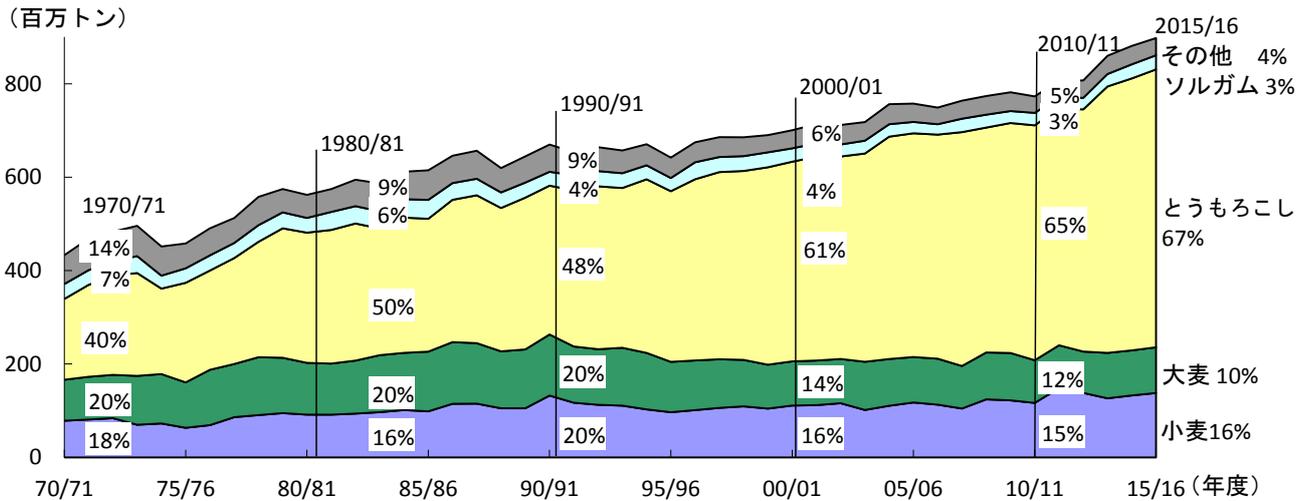
(単位:百万トン)

区 分	2011/12	2012/13	2013/14	2014/15	2015/16 (予測)	対前年度 増減率(%)	世界に占め る割合(%)
世界合計	148.4	138.2	126.7	132.8	138.0	3.9	100
E U	57.5	51.0	49.0	54.5	57.0	4.6	41
中国	24.0	25.0	16.0	17.0	15.0	▲ 11.8	11
ロシア	15.5	11.9	12.5	13.0	14.0	7.7	10
カナダ	4.7	4.3	4.2	3.8	3.8	0.3	3
インド	3.1	3.4	4.8	4.5	4.8	6.7	3
(参考)							
米 国	4.3	9.9	6.2	3.3	4.1	24.4	3

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、「Grain: World Markets and Trade」、「PS&D」（January 2016）

また、穀物全体の飼料用需要は、長期的に増加傾向にあるが、全体に占める小麦の割合は横ばいとなっている。（表 IV-1-⑥、図 IV-1-②）

図 IV-1-② 世界の穀物の飼料用需要の内訳

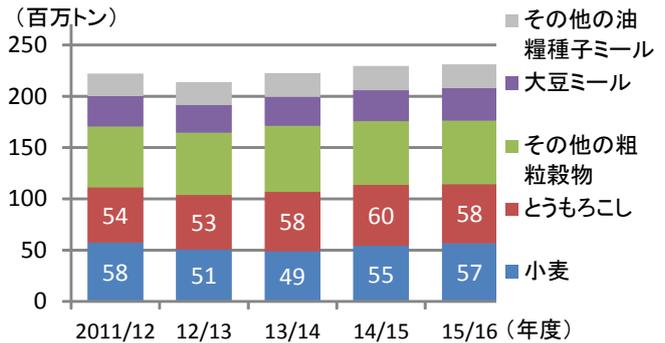


資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、「Grain: World Markets and Trade」、「PS&D」(January 2016)をもとに、農林水産省で作成。

EUでは、従来から飼料用としての小麦の需要が世界最大であるが、2015/16年度は、とうもろこしの生産量が減少したことも相まって、小麦の飼料用需要は前年度より増加(4.6%)し、57.0百万トンとなる見込みである。

(図 IV-1-③)

図 IV-1-③ 品目別飼料用需要の推移 (EU)

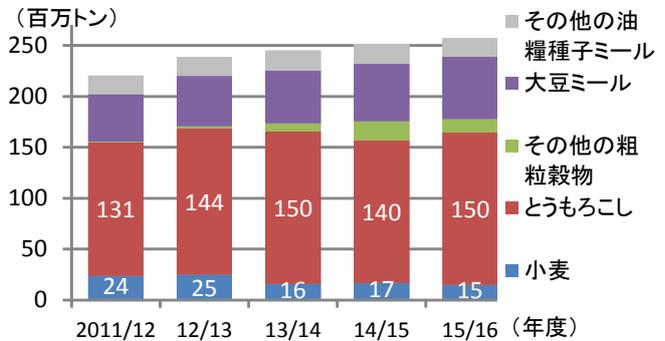


資料：USDA「PS&D」(January 2016)をもとに、農林水産省で作成。

中国では、食肉生産の増加に伴い飼料用穀物の需要は引き続き増加しており、とうもろこしの飼料用需要が継続的に増加しているものの、2015/16年度は小麦の飼料用需要は前年度より減少(11.8%)し、15.0百万トンとなる見込みである。(図 IV-1-④、⑤)

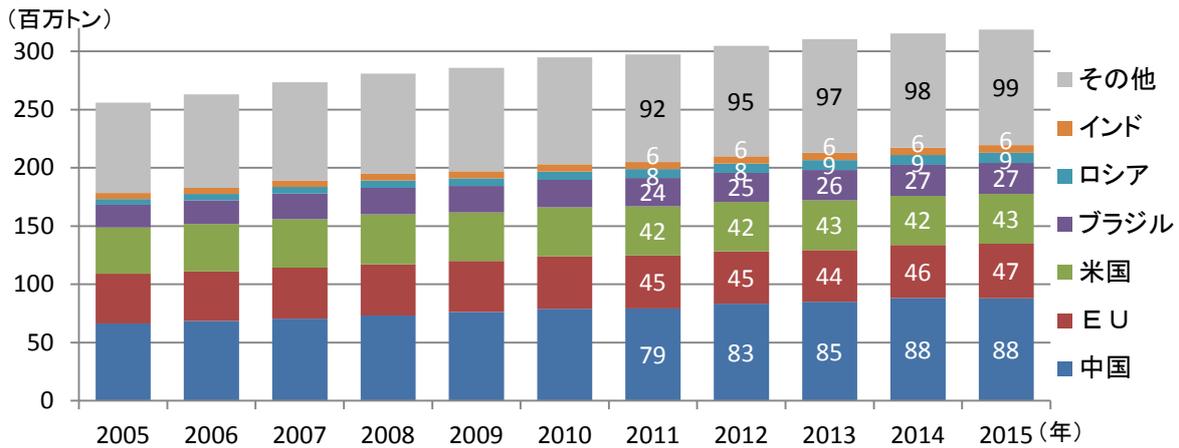
一方、国際連合食料農業機関 (FAO)「Food Outlook」(October 2015)は、とうもろこしの国内価格が高いことから、大麦、ソルガム及び小麦の飼料用需要が高まると見ている。

図 IV-1-④ 品目別飼料用需要の推移 (中国)



資料：USDA「PS&D」(January 2016)をもとに、農林水産省で作成

図 IV-1-⑤ 世界の食肉生産量の推移



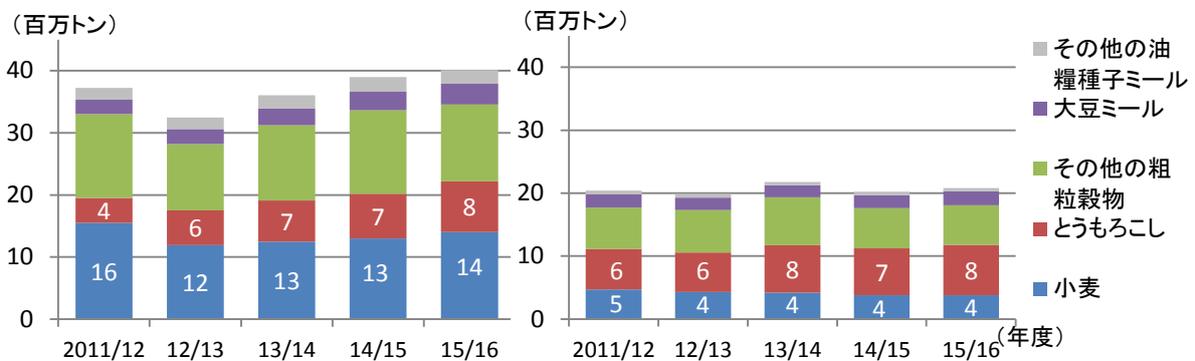
資料：FAO「FAOSTAT」、「Food Outlook (October 2015)」のデータをもとに、農林水産省で作成
注) 生産量は、枝肉重量換算した (carcass weight equivalent) 重量

ロシアでは、小麦の生産量が前年度に引き続き増加したことから、飼料用小麦の消費量も前年度より増加 (7.7%) し、14.0 百万トンとなる見込みである。

カナダでは、飼料用小麦の消費量はほぼ前年度並み (0.3%) の 3.8 百万トンとなる見込みである。

(図 IV-1-⑥)

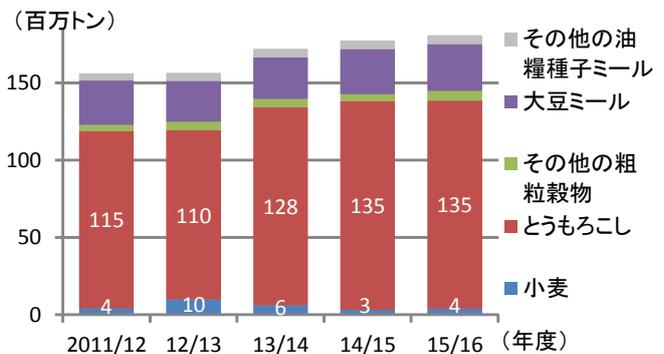
図 IV-1-⑥：品目別飼料用需要の推移 (ロシア、カナダ)
(ロシア) (カナダ)



資料：USDA「PS&D」(January 2016)をもとに、農林水産省で作成

米国では、従来から飼料用としてとうもろこしの需要が最も多いが、2015/16 年度は低品質の小麦が多いことから、小麦の飼料用需要は前年度より増加 (24.4%) し、4.1 百万トンとなる見込みである。(図 IV-1-⑦)

図 IV-1-⑦：品目別飼料用需要の推移 (米国)



資料：USDA「PS&D」(January 2016)をもとに、農林水産省で作成

ウ 貿易量

2015/16年度の貿易量（輸出量）は、生産量が増加するイラン等の中東諸国における輸入需要の減少等から、世界全体では前年度より2.8百万トン減少（▲1.7%）し、161.6百万トンとなる見込みである。

（表 IV-1-⑦、図 IV-1-⑧）

表 IV-1-⑦ 世界の小麦貿易の状況

(単位:百万トン)

区分	2011/12	2012/13	2013/14	2014/15	2015/16 (予測)	対前年度 増減率(%)	世界に占める 割合(%)
世界合計	158.2	137.4	165.9	164.4	161.6	▲ 1.7	100
(輸出国)							
EU	16.7	22.8	32.0	35.4	32.5	▲ 8.2	20
ロシア	21.6	11.3	18.6	22.8	23.5	3.1	15
米国	28.6	27.5	32.0	23.2	21.8	▲ 6.4	13
カナダ	17.4	19.0	23.3	24.1	20.5	▲ 15.0	13
豪州	24.7	18.6	18.6	16.6	18.0	8.4	11
(参考)							
ウクライナ	5.4	7.2	9.8	11.3	15.5	37.5	10
カザフスタン	11.8	6.3	8.1	5.5	6.5	17.3	4
アルゼンチン	12.9	3.6	2.3	5.5	6.0	9.1	4
(輸入国)							
エジプト	11.7	8.3	10.2	11.1	11.5	4.0	-
インドネシア	6.5	7.1	7.4	7.5	8.1	8.3	-
アルジェリア	6.5	6.5	7.5	7.3	7.7	6.1	-
ブラジル	7.3	7.4	7.1	5.4	6.3	17.2	-
EU	7.4	5.3	4.0	6.0	6.0	0.5	-
日本	6.4	6.6	6.1	5.9	5.8	▲ 1.3	-
(参考)							
イラン	0.8	6.6	4.8	6.3	4.0	▲ 36.5	-

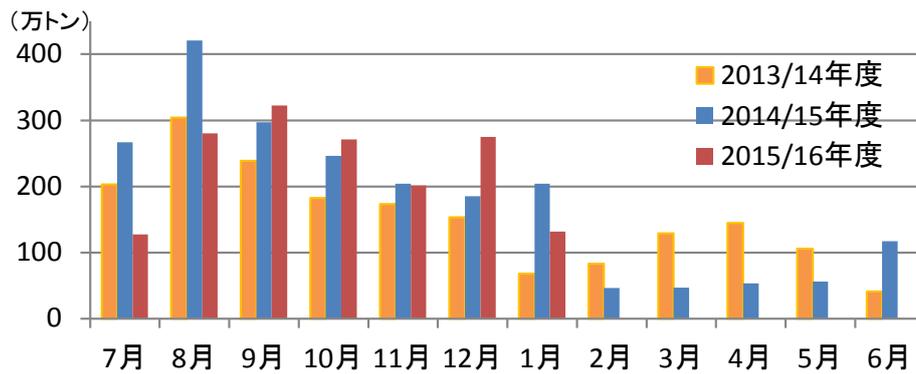
資料: USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、「Grain: World Markets and Trade」、「PS&D」(January 2016)

輸出国では、ウクライナ、豪州等で増加する一方、カナダ、EU、米国、で減少する見込みである。

EUでは、輸出量は引き続き第1位となるものの、世界全体の貿易量の減少やロシア、ウクライナ等黒海沿岸地域との競争激化から、史上最高となった前年度より減少（▲8.2%）し、32.5百万トンとなる見込みである。

ロシアでは、政府が2015年2月から2015年5月半ばまで輸出税を賦課する措置を講じ、2015/16年度（2015年7月～）以降も同措置を講じているものの、現地通貨安等を背景に輸出が堅調に推移していることから（図 IV-1-⑧）、輸出量は前年度より増加（3.1%）し、23.5百万トンと米国を抑えて第2位に浮上する見込みである。主な輸出先は、エジプト、トルコ、イラン等のアフリカ、中東諸国となっている。（輸出税の詳細は8頁（ロシアの輸出規制の動き）を参照）

図 IV-1-⑧ ロシア産小麦の月別輸出量の推移



資料：ロシア連邦税関局のデータを基に、農林水産省で加工。

米国では、世界的に供給が潤沢であることや、2015年春以降、他の通貨に対してドル高が進行していること等から、輸出量は前年度より減少（▲21.4%）し、25.2百万トンと1971/72年度以降で最も少なくなる見込みである。

カナダでは、豊作となった2013/14年度以降、2年連続で生産量が減少することや、北アフリカ、EU、米国での生産増からデュラム小麦の輸入需要が減少すること等から、輸出量は前年度より減少（▲20.5%）し、20.5百万トンとなる見込みである。

カナダ農務農産食品省「Outlook for Principal Field Crops」（2016年1月）によれば、種類別の小麦輸出量は、デュラム小麦が4.3百万トン（対前年度比16.8%減）、デュラム小麦以外が17.5百万トン（同6.7%減）となる見込みである。

豪州では、生産量が前年度を上回るとともに、同国の主要輸出市場であるインドネシア等の東南アジアで製粉用小麦の需要が堅調であること等から、輸出量は前年度より増加（8.4%）し、18.0百万トンとなる見込みである。

写真：ロシア南部 ノヴォロシスク港（2015年8月）
穀物ターミナルの輸出用バース

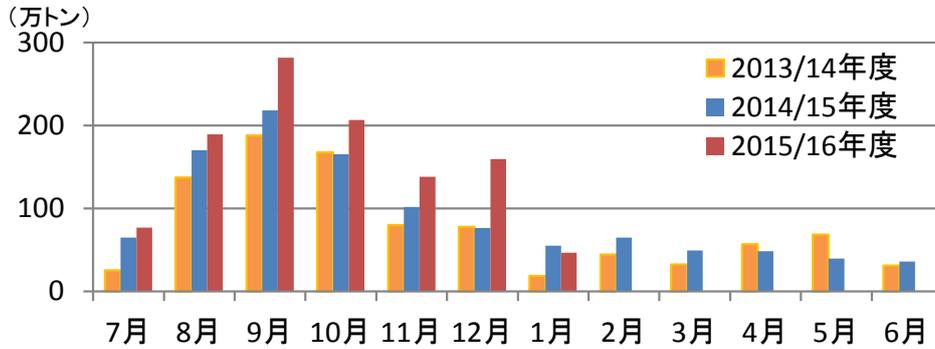


写真：ロシア南部 アゾフ港（2015年9月）
穀物ターミナルに到着した穀物貨車



ウクライナでは、生産量が前年度を上回るとともに、現地通貨安等を背景に輸出が堅調に推移していることから（図 IV-1-⑨）、輸出量は前年度より増加（9.1%）し、15.5 百万トンと史上最高となる見込みである。主な輸出先は、タイ、インドネシア、韓国等のアジア地域や、地中海に面するエジプト、スペイン等となっている。

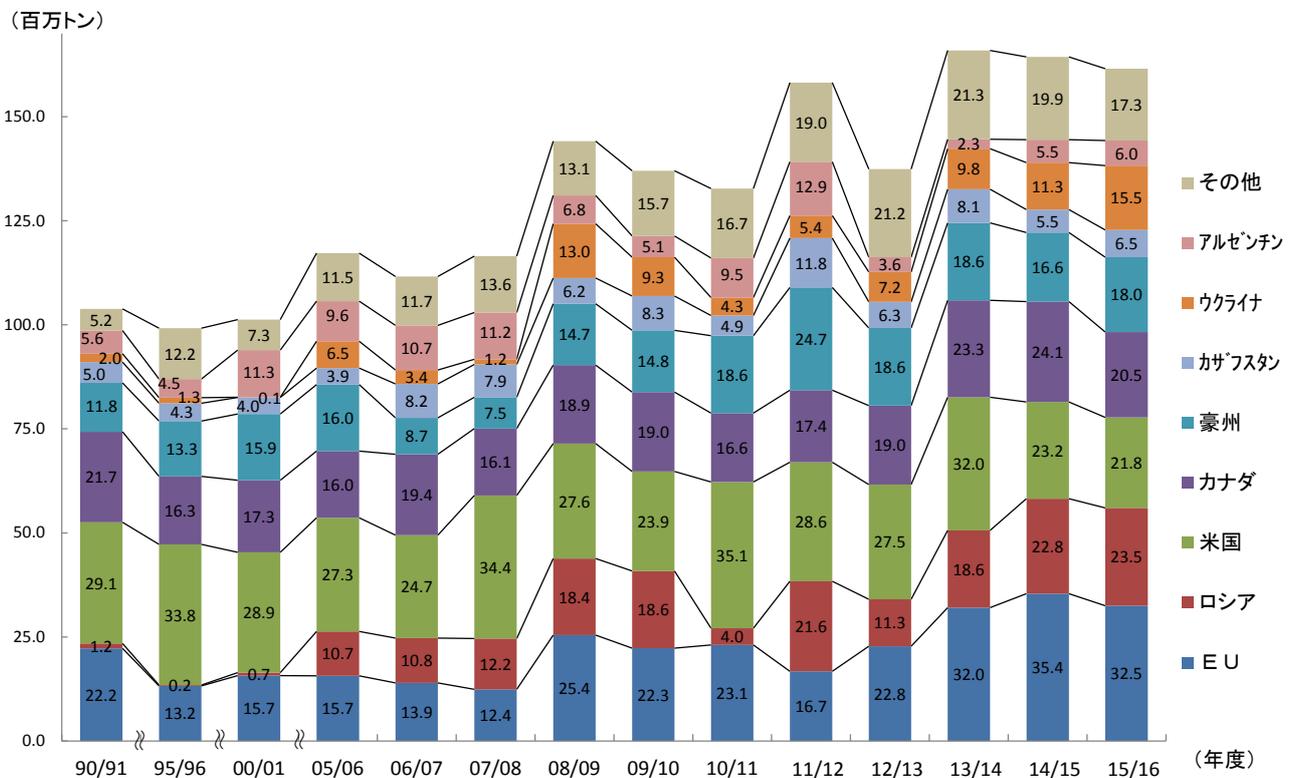
図 IV-1-⑨ ウクライナ産小麦の月別輸出量の推移



資料：ウクライナ税関のデータを基に、農林水産省で加工。

アルゼンチンでは、生産量が前年度を下回るものの、2015年12月の政権交代に伴い、輸出税（23%）が撤廃されるとともに輸出登録制度が廃止されたこと等から、輸出量は前年度より増加（9.1%）し、6.0 百万トンとなる見込みである。（図 IV-1-⑩）

図 IV-1-⑩ 世界の小麦輸出量の推移



資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、「Grain: World Markets and Trade」、「PS&D」（January 2016）をもとに、農林水産省で作成。

輸入国では、イラン等で減少するものの、ブラジル等の主要輸入国で増加する見込みである。

エジプトでは、生産量が前年度を下回る一方で、人口増等に伴い食料用需要の増加が見込まれること等から、輸入量は、前年度より増加（4.0%）し、11.5 百万トンとなる見込みである。

インドネシアでは、人口増に伴い国内での小麦製品の需要が引き続き堅調で上昇傾向で推移していることから、輸入量は前年度を上回り（8.3%）、8.1 百万トンとなり、4 年連続で史上最高を更新する見込みである。

アルジェリアでは、生産量が降水量不足に見舞われた前年度から回復して増加に転じるものの、人口増等に伴い食料用需要の増加が見込まれることから、輸入量は前年度より増加（6.1%）し、7.7 百万トンとなる見込みである。

ブラジルでは、主産地の南部でシーズン終盤に大雨に見舞われたこと等に伴い生産量が前年度を下回ることから、輸入量は前年度より増加（17.2%）し、7.0 百万トンとなる見込みである。

イランでは、生産量が悪天候に見舞われた前年度から回復して増加に転じることから、輸入量は前年度より減少（▲36.5%）し、4.0 百万トンとなる見込みである。

エ 期末在庫量

2015/16 年度の期末在庫量は、生産量が消費量を上回ることから、世界全体では前年度より 19.2 百万トン増加（9.0%）し、232.0 百万トンとなり、期末在庫率も 32.4%と前年度を上回る（2.3 ポイント増）見込みである。

なお、2015/16 年度の世界全体の期末在庫量に占める国・地域別の割合を見てみると、第 1 位の中国が 38%、第 2 位の米国が 11%、第 3 位の EU が 8%と、上位 3 カ国・地域で全体の半分以上を占める見込みである。（表 IV-1-⑧、図 IV-1-⑪）

表 IV-1-⑧ 世界の小麦の期末在庫の状況

（単位：百万トン）

区 分	2011/12	2012/13	2013/14	2014/15	2015/16 (予測)	対前年度 増減率(%)	世界に占める 割合(%)
世界合計	197.8	177.0	194.0	212.8	232.0	9.0	100
中 国	55.9	54.0	65.3	74.1	87.3	17.8	38
米 国	20.2	19.5	16.1	20.5	25.6	25.1	11
E U	13.5	10.7	9.9	13.5	19.3	42.3	8
インド	20.0	24.2	17.8	17.2	11.9	▲ 30.8	5
イラン	0.8	5.1	7.2	7.8	7.3	▲ 6.4	3
期末在庫率	28.4%	26.1%	27.8%	30.1%	32.4%	2.3	-

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、「Grain : World Markets and Trade」、
「PS&D」 (January 2016)

中国では、前年度に引き続き生産量が消費量を上回るとともに、輸入量が増加することから、期末在庫量が増加（17.8%）して史上最高となり、期末在庫率も 73.4%に上昇する見込みである。

米国では、生産量が前年度を上回るものの輸出量が前年度を下回ることから、期末在庫量が増加（28.4%）して 2009/10 年度以降で最大となり、期末在庫率も 49.3%に上昇する見込みである。

EUでも、生産量が前年度を上回るものの輸出量が前年度を下回ることから、期末在庫量が増加（42.4%）、期末在庫率も 12.2%に上昇する見込みである。

写真：ドイツ北部 ハンブルク（2015年7月）
穀物運搬用貨車（手前）と穀物倉庫（奥）

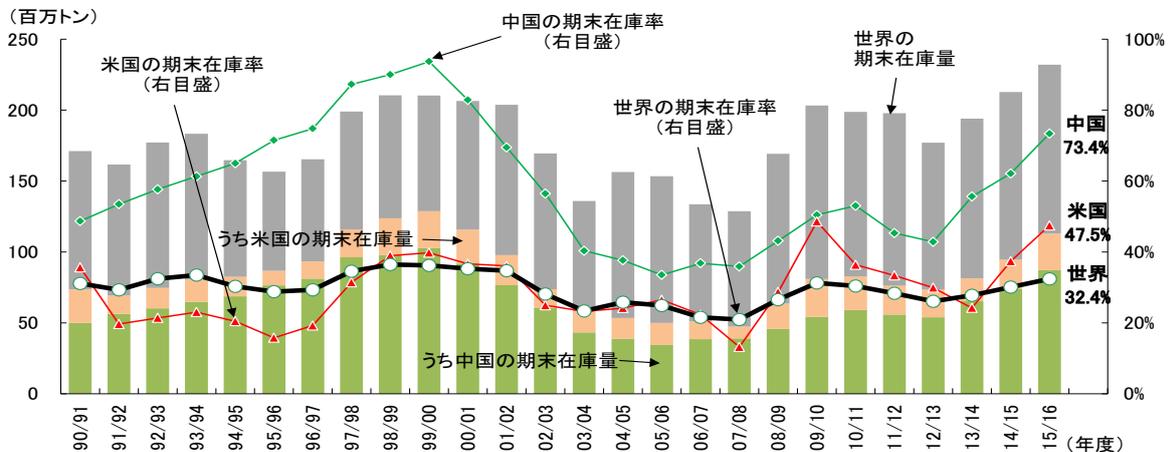
写真：ドイツ中部 ザクセン・アンハルト州
トラックでの穀物倉庫への搬入（2015年7月）



インドでは、生産量が増加するものの、前年度に引き続き、消費量と輸出量の計が生産量を上回ることから、期末在庫量は前年度を下回り（▲8.6%）、期末在庫率は 16.7%に低下する見込みである。

ロシアでは、生産量が前年度を上回るものの、消費量及び輸出量の伸びがそれを上回ることから、期末在庫量が減少（▲30.8%）し、期末在庫率も 12.6%に低下する見込みである。

図 IV-1-⑪ 世界の小麦の期末在庫量（率）の推移



資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、「Grain : World Markets and Trade」、「PS&D」 (January 2016)をもとに、農林水産省で作成。